

科目名	<b>開発研究入門</b> <2022年5月14日(土)・15日(日) / 名古屋キャンパス(対面形式及びオンライン形式のハイフレックス形式) >	2単位
担当者	吉村 輝彦 / 砂原 美佳	
テーマ	開発研究に関わる基礎的理解と修士課程での学び	
科目のねらい	<キーワード> 開発研究、研究方法、フィールドワーク、修士論文、ネットワーキング  <内容の要約> ・本研究科のカリキュラムの基礎にある開発の考え方や研究方法論を習得する。合わせて、修士課程における学習方法、修士論文の執筆に向けた研究の理論枠組みの作り方や研究の進め方を理解する。 ・日頃はインターネット上で学習を進める院生にとって、この科目は、院生同士が直接の「顔合わせ」を行う機会でもあり、WEBを通じた今後の研究活動やコミュニケーションの円滑化を図り、また、ネットワーキングをする。  <学習目標> ・本研究科のカリキュラムの基礎にある開発の考え方や研究方法論の基本的な事項を理解できる。 ・修士課程における学習方法、修士論文の執筆に向けた研究の理論枠組みの作り方や研究の進め方を理解できる。	
授業の進め方	本科目では、開発研究に関わる基礎的理解を図る講義と合わせて、リサーチ指導教員による研究指導や新入生の相互交流等ネットワーキングを通じて、修士課程における調査研究の円滑な導入や促進を図る。  本科目は、集中講義形式で二日間にわたり終日行う。2022年度のプログラムは、検討中であり、対面形式及びオンライン形式のハイフレックス形式での実施予定である。なお、新型コロナウイルスの感染状況によっては、実施方式の変更の可能性はある。 参考として、2021年度の対面形式及びオンライン形式のハイフレックス形式を前提にしたプログラムを以下に示す。実際には、全面オンライン形式で実施された。  <対面形式及びオンライン形式のハイフレックス形式を前提にしたプログラム> 2021年5月22日(土) 09:00-09:15 オンライン形式での参加者の接続確認 09:15-09:30 オリエンテーション(吉村 輝彦 教授 / 砂原 美佳 准教授) 09:30-11:00 講義「大学院での学びと研究方法」(小國 和子 教授 / 研究科長) 11:15-12:45 講義「論文の書き方」(野田 直人 教授) 12:45-13:45 昼休み 13:45-15:00 ガイダンス「大学院での学びや修士論文の執筆を意義あるものにするために」(吉村 輝彦 教授) 15:00-17:50 各リサーチ担当教員(指導教員)による研究指導 18:30-19:30 オンライン懇親会(希望者のみ)  2021年5月23日(日) 09:30-11:30 講義「福祉社会開発の理論と実際」(穂坂 光彦 客員教授) 11:30-12:30 昼休み 12:30-13:30 講義「私の修論経験」(2020年度修了生) 13:45-14:45 講義「修士論文を書く上でやっておくべきこと」(砂原 美佳 准教授) 15:00-16:30 院生による情報交流・意見交換ワークショップ	

	16:40-17:20 振り返り及びまとめ (吉村 輝彦 教授/砂原 美佳 准教授) 17:30 名古屋キャンパス閉館
事前学習の内容・ 学習上の注意	○修士論文に向けた論文計画の内容を確認し、必要に応じて、修正しておくこと。 ○指定したテキストを事前に読んでおくこと。
本科目の 関連科目	「国際社会開発の基礎」「研究方法論」
テキスト	
参考文献	
成績評価方法 と基準	全2日間にわたる講義へすべて出席することを前提として、事前学習 (30%)、質疑 応答への積極参加等の受講態度 (70%) を総合的に勘案して評価する。

科目名	国際社会開発の基礎	2単位
担当者	穂坂光彦	
テーマ	そもそも開発＝発展(development)とは何か、開発とは貧しい国を援助することであろうか、開発とは計画されたプロジェクトを実施することなのか。あらためてこうした問いかけに発して、地域（とくに「南」世界の地域社会）の開発に関わる基本課題や理論について、主として開発社会学的アプローチから総合的に学ぶ。さらに国家同士の枠組みを越えて、地球市民として踏まえるべき南の国々(Global South)との関係について議論する。その意味では「開発教育の基礎」でもある。	
科目のねらい	<p>&lt;キーワード&gt; 開発（発展）、開発教育、市民交流</p> <p>&lt;内容の要約&gt; いわば「国際社会開発入門」として、国際開発・社会開発の対象についての視野を広げ、洞察力を培うことを目指す。さらに履修者が自身の視点を相対化し確認するのを支える。多岐にわたる内容－開発理論、人権、ジェンダー、障害、コモンズ、参加、連帯経済、民衆交流など－について概観しながら、「そこで、自分の研究は、何を、どう扱うのか」を考え、修士論文作成のための素材や方法について、ヒントを得てほしい。</p> <p>&lt;学習目標&gt; 1. 国際社会開発の基本的課題や基礎的理論を理解する。 2. 上記を踏まえて、履修者自らの修論研究や開発実践の方法を相対化し、自身のアプローチを確立する一歩とする。</p>	
授業の進め方	<p>下記のテーマについて、テキスト（2022年度版）を基に、その分析と討議を繰り返す。基本的に、各テーマに対する設問を用意し、各自が見解を述べ合う形になる。</p> <p>第1週 イン트로ダクション 第2週～第3週 開発と「援助」 1. 開発を学ぶということ 2. 「南」から見た世界：開発教育の視点 3. 「南」から見た世界：開発の視点 4. 構造調整援助 第4週～第5週 開発領域のフロンティア（文化、人権、ジェンダー、障害） 5. 「知」は誰のものか：グローバリゼーションと伝統的知識 6. ジェンダーの視点 7. 福祉と「社会開発」 8. 障害と地域社会の開発 第6週～第7週 制度とインフォーマル世界 10. 人口の増加と移動 11. 都市インフォーマル経済 12. アジアの草の根社会保障 第8週～第9週 プロセスとしての開発 12. 居住福祉 13. 計画観の転換 第10週～第11週 開発の理論と政策 14. 豊かさの指標 15. 支援的政策環境 (enabling policy environment) 16. 発展の権利 第12週～第13週 地域の共同管理 17. ソーシャルキャピタル 18. マイクロクレジット 19. コモンズの現在</p>	

	第14週～第15週 開発における土の人と風の人 20. 参加型アプローチ 21. オルタナティブな経済 22. 民際交流の行商人
<b>事前学習の内容・ 学習上の注意</b>	与えられたテキストを読み、自分がコーディネーター（司会）を務めたい講と、指定討論者を務めたい講とを決める。履修者は、予めテキスト該当箇所を読んで議論に参加するのはもちろんであるが、関連して各自の現場での経験、参考データや文献、新聞やインターネットの情報などを進んで紹介し、かつ批判的に検討して議論を深める。
<b>本科目の 関連科目</b>	
<b>テキスト</b>	穂坂光彦編著『国際社会開発の基礎』2022年度版（当研究科オリジナルテキストをハードコピーおよびPDFで事前配布する）
<b>参考文献</b>	テキスト内に記載。かつ適宜指示する。また関連教材を研究科掲示板に掲載する予定なので、各自ダウンロードすること。
<b>成績評価方法 と基準</b>	掲示板ディスカッションへの量的・質的参加度（70%）と提出レポート（30%）により評価を行い、全体で60%以上を合格とする。

科目名	研究方法論	2単位
担当者	小國 和子	
テーマ	自らの視点を相対化し、論文のリサーチクエスチョンを育てる	
科目のねらい	<p>&lt;キーワード&gt; リサーチ・リテラシー、問いを育てる、仮説をきたえる、フィールドワーク、参与観察</p> <p>&lt;内容の要約&gt;          本科目では、受講者の実務的な経験に端を発する「初発の関心」を、学術論文における「問い」へと鍛えていくプロセスについて理解を深めることを目的とする。          また、講師の専門である文化人類学を背景に、フィールドワークを中心とする質的調査の方法論と実践上の具体的な課題について、特に開発や福祉現場での調査を念頭において議論を行う。なかでも、受講生が自分のかかわった事業や身近な開発実践を事例として研究する上で考えられるバイアスの軽減や、求められる姿勢の獲得についてとりあげたい。          他者の現実を聞き取り、分析し、書くという行為においては、調査者が自らのもつフィルターに自覚的になり、調査の質を保つことが求められる。また、この科目は質的な方法の紹介が中心となるが、実際に論文を書く際には、統計資料などをうまく活用して総合的にデータとしての説得力を高めることが必要である。          本科目を通じて、研究・調査活動に際して求められる調査者としての姿勢や、質的調査の実践に必要なエチケットやマナー、技術を獲得し、自らの問題意識をリサーチクエスチョンへと研ぎ澄ませ、修士論文執筆の準備を進める一助としてほしい。</p> <p>&lt;学習目標&gt;          ・初発の関心を学術的にも社会的にも意味のあるリサーチクエスチョンへと発展させ、自らの修士論文における「問い」を見出すことができる。          ・聞き取りや参与観察など、質的データを主とするフィールドワークの方法を学び、実践することが出来る。</p>	
授業の進め方	<p>この研究科に属する社会人院生の特徴を踏まえ、この科目では、意図的に3冊のテキストを併用する。テキスト指定した3冊から受講生各自が自らの関心と経験に合わせて担当箇所を選び議論を進めることで、参加者の関心に即して議論のフォーカスを調整しながら授業を行う。テキスト①と②は電子書籍として入手が可能。テキスト③は全般的に平易に論文作成までの手順を説明してくれているので、紙ベースの本のみだが、参考書的に全員が通読するとよい。</p> <p>全体的なスケジュール案は以下の通り。テキストから院生各自が各セッション課題に関連するテキスト章を選び、複数の担当者の発表と全員でのディスカッションで授業を進行する。必ずしもすべての章を授業内で扱うわけではないが、修士論文執筆準備の一環で、自習用という意図も込めての3冊であること、ご理解願いたい。終盤は、課題レポートに対するピアレビューを中心に進める。</p> <p><u>セッション1</u> 「初発の関心」紹介、担当分担決め  <u>セッション2</u> 研究視点を養い、問いを鍛える          ・テキスト③より第1・2・3章          ・テキスト①よりchapter2「問いを育てる」・3「仮説をきたえる」  <u>セッション3</u> 「これまでにわかっていること」を知り「まだわかっていないこと」を捉える          ・テキスト①よりchapter5「文献レビュー」          ・テキスト③より第4章「なぜ「先行研究」をレビューするのか」  <u>セッション4</u> 研究プロセスに「調査」をうまく取り入れる          ・テキスト②より序章「質的調査とは何か」          ・テキスト①よりchapter4「調査の企画と実行」・7「リサーチデザイン」          ・テキスト③より第7・8・9章</p>	

	<p>セッション5 各論「フィールドワーク」 ・テキスト②より第 1 章</p> <p>セッション6 各論「参与観察、インタビュー」 ・テキスト②第 2・3 章 ・テキスト③より第 5・6 章</p> <p>セッション7 論文を書く ・テキスト③より第 10・11 章</p> <p>セッション8 課題レポートのピアレビュー</p> <p>※修士論文を書くにあたり、特にこれまでに学術論文を執筆した経験が不足していると考え る人は、上で書いた通り、論文の書き方や研究方法論についての類書を 2～3 冊、同時並行 で読み進めることで、共通項目を理解し、研究プロセスに関するセンスを養うことができる。こ の点、今回採用した 3 冊はいずれも、学部生から社会人までに向けた比較的平易な入門書 であり、各一冊を深く読み込むというよりは、関連する項目(たとえば「問いを立てる」とは、とい うことについて 3 冊とも扱っている)を同時並行で読むことで、ポイントをより深く理解でき るだろうと期待している。しかしそういう理解の仕方が成り立つためには、受講生諸君の間で、そ れぞれに読んでみた感想や意見が積極的に出される必要がある。3 冊すべてを読み込んで 参加することが難しくても、とにかく議論には参加しよう、という気持ちで受講してほしい。</p> <p>※開講時に改めて全体スケジュールと、各テキストをどのように併用するか、大体の提案を 行う。ただし、すべてを網羅的というよりは、その時々を受講生の関心に引き付けて多少の 濃淡をつけたい。そのうえで、院生自身から希望を集約し、最初の 2 週間で各自の分担を決 める(概要×意見、コメンテーター等、受講者数に応じて掲示板上で説明する)。その後は、 議論の進捗に応じて柔軟に調整しつつ運用する。</p> <p>※受講者全員が授業の作り手となる。基本的には、各受講者の分担によるテキスト発表によ って授業を進めるが、要約や一般論におわらせず、各自の経験や関心にひきつけた発展的 な討議を重視する。また、必要に応じて講師の経験等を踏まえた事例の紹介も行なう。受講 者各自が問題関心を積極的に開示して議論を進めていくことを期待する。</p> <p>受講者が自らの研究テーマにおいていかなるフィールドワークが必要且つ可能であるかを 考え、実践の手助けとなる議論をすすめたい。また、受講者のフィールドワークや業務の現状 等に応じて質疑応答ができるよう、授業の進行には柔軟性を確保したい。</p>
事前学習の内容・ 学習上の注意	<p>・授業開始までに指定テキストを入手し、ざっくり目を通して、自分の学習ニーズにあわせて 担当を希望する本の章を検討しておくこと。</p> <p>・質的調査やフィールドワークに関する基礎知識がない場合、あるいは逆に、すでに素地が あり、より深く学びたい場合は、下記などほかの参考文献も積極的に入手して読んでおくこと。</p>
本科目の 関連科目	
テキスト	<p>テキスト①佐藤郁哉(2021)『はじめての経営学 ビジネス・リサーチ』東洋経済(電 子書籍 Kindle 版あり)。</p> <p>テキスト②岸政彦ほか(2016)『質的社会調査の方法 他者の合理性の理解社会学』 有斐閣(電子書籍 Kindle 版あり)。</p> <p>テキスト③太田裕子(2019)『はじめて「質的研究」を「書く」あなたへー研究計画 から論文作成まで』東京図書。</p> <p>※テキストを 3 冊併用する理由:この科目では 2021 年度まで、下記で参考文献に挙げてい る佐藤郁哉(2002)『フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる』(新曜社)1 冊 を教科書指定してきた。同書は、漠然とした初発の関心から、「調べながら」リサーチクエス ションを研ぎ澄ませていく過程を「仮説生成プロセス」として解説している点が秀逸であつた。こ れが、実務上の漠然とした問題意識を有して入学し、問い自体を見直していくプロセスが重 要となる本研究科の受講生にぴったりであつた。</p> <p>しかし、出版から 20 年を経て、在外勤務者には入手し難い例が出てきたこと、また、近年 の入学者の中には学術論文を書くこと自体がはじめてで、この 1 冊だけでは理解不足になり</p>

	<p>がちとなる場合があることから、上に述べた通り、「複数冊を併行して読むことで、理解を促す」戦略を採用することとした。入手のための購入額は多少上がってしまうが、その分、単価を抑え、かつ、電子書籍として入手できるものを優先したのでご理解いただきたい。</p> <p>なお、紹介した3冊は、いずれも非常に評判の良いテキストであるが、本研究科で用いるには、若干、「帯に短したすきに長し」の点がある。テキスト①は「はじめての経営学」と銘打っているように、やや社会人のビジネスリサーチ寄りの事例や先行文献の紹介に偏りが感じられる。テキスト②は「そもそも研究とは何か」というところからスタートしてくれず、質的調査とは、と話を始めているので、その点が実務家院生に対する導入としては物足りない。その点においてテキスト③は、2021年度受講生のススめでもとても分かりやすいテキストであると感じたため導入した。だが、学部生が恐らくメインターゲットであり、大学院の基本教科書とするには1冊では心もとない。また、紙ベースの本しかないため、万が一遠方の国在住者で、期間中に入手できない場合は、テキスト①②を読んで議論に参加し、テキスト③については他の人の発表で理解し議論ができるような授業運営を考えている。ただ、テキスト③は院生からのおすすめだけあって、とても平易でとつきやすい書き方がされているので、これからの論文作成に不安な人は、授業に間に合わなくとも、通読するとよいだろう。</p> <p>以上、3冊のテキストを読むときには、この科目における「使い道」を念頭に、ざっくり目を通していくとよい。読み飛ばしがあっても、議論の中で気づいて読み直しをすればよいのだ。大胆に読み進めてほしい。</p> <p>※テキスト入手が難しい事情がある場合は早めに掲示板やメールでご相談下さい。  ※繰り返しになるが、方法論のテキストは、数冊を合わせ読むと共通のポイントが浮かび上がり、理解が深まる。このため、上記テキストはじめ、以下参考文献で示す関連書に関心に応じて読むことをお勧めする。授業の中でも随時、他文献も紹介していく。</p>
<p>参考文献</p>	<p>・佐藤郁哉(2002)『フィールドワークの技法:問いを育てる、仮説をきたえる』、新曜社。  2021年度までは本書のみを教科書として用いていたが、海外在住者が入手に時間がかかる例があったため、受講院生への配慮として、比較的新しく入手しやすいテキストに変更した。しかしながら、上述の通り、本書は大学院生にぜひ読んでおいてほしいものである。著者の佐藤は多くの本を出版しているが、今でも尚、「漸次構造化」「仮説生成プロセス」というキーワードを手掛かりに、初発の問題意識を論文におけるリサーチクエスチョンに向けて醸成していくプロセス自体に焦点を当てテキストとしては本書が秀逸である。このため、入手できる人はぜひ手に入れて、第3章の「漸次構造化」を中心に読み込んでほしい。</p> <p>・波平恵美子・小田博志(2010)『質的研究の方法 いのちの&lt;現場&gt;を読みとく』春秋社。  日本を代表する医療人類学者の波平と、民族誌的研究の実際を学外向けに明快に語る次の世代の研究者、小田博志の対談集。主に小田が波平の経験を引き出すようなやりとりを通じて、質的研究とは何か、フィールドワークやアブダクションといったキーワードの解説も交えながら展開している。本科目の主テキストの副読本として目を通してほしい。</p> <p>・ウヴェ・フリック『質的研究入門&lt;人間の科学&gt;のための方法論』(2002)春秋社。  本科目では、必ずしも質的研究方法論自体を深めたい受講生が多くないため主テキストとしての採用は控えているが、学術的な研究方法論としての質的研究について網羅的に理解したい人は、本書が良テキストである。ぜひ入手して参考書として手元に置いておくるとよい。博士課程院生は必ず一度は目を通すこと。また、関心があれば、主テキストではなく本書の一部を授業で発表してもよい。</p> <p>その他、授業開始後に適宜、関連文献を紹介していく。</p>
<p>成績評価方法と基準</p>	<p>原則として、担当セッションでの発表と司会進行をはじめとする掲示板での発言、コメントの書き込み(60%)と、最終レポート(40%)によって成績評価を行ない、総合評価60点以上を合格とする。</p>

科目名	社会調査とデータ解析	2単位
担当者	千頭 聡	
テーマ	社会調査の基本的な考え方や統計学の基礎を理解したうえで、多変量データの解析手法を学び、量的分析を行えるようにする	
科目のねらい	<p>&lt;キーワード&gt; 量的調査 社会調査 統計データ データの収集と解析 多変量解析</p> <p>&lt;内容の要約&gt; 地域社会開発を進めるにあたって、対象とする地域の社会経済的なデータの収集と特性把握、地域住民の意識構造の把握・分析などを行うことは、重要な支援ツールとなる。本科目では、地域住民の意識構造を把握するための社会調査の基本や留意点、各種統計的なデータの収集と統計的な分析手法などについて述べる。特に、地域開発の分野で役立つ多変量データの解析手法（分散分析、重回帰分析、因子分析、数量化Ⅰ類～Ⅲ類など）について紹介する。</p> <p>&lt;学習目標&gt; 1 社会調査の基本的な考え方、調査方法、解析方法などについての基本を学び、自らの課題に応じた調査設計ができるようになる。 2 地域開発の分野で利用可能な多変量解析手法の目的や解析結果の読み方が理解でき、自らの課題に応じた手法の取捨選択ができるようになる。</p>	
授業の進め方	<p>配布するレジメおよびテキストに基づいて学習を進め、適宜、掲示板などを用いて質疑応答などを行う。</p> <p>第1回～第2回 データ解析の基本（データの見方、基本的な解析方法、既存の統計など） 第3回～第6回 社会調査法 （調査方法概論、調査票設計上の留意点、調査結果の集計・分析方法など） 第7回～第12回 多変量解析 （分散分析、重回帰分析、数量化Ⅰ類、判別分析、数量化Ⅱ類、因子分析、数量化Ⅲ類 など） 第13回～第14回 演習 第15回 まとめ</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>○社会調査（アンケート調査）については、自分の関心があるテーマに関わる調査票設計の簡単な課題を課す。また、多変量解析手法の適用イメージについてのレポートも課す。</p> <p>○指定したテキストを自主的に読むとともに、積極的に質問することを期待する。</p>	
本科目の関連科目	特になし	
テキスト	岩淵千明他「あなたもできるデータ解析の処理と解析」福村出版、2600円	
参考文献		
成績評価方法と基準	2回のレポート（50%ずつ）により評価する	